

立教大学コミュニティ福祉研究所学術研究推進資金

企画研究プロジェクトⅡ（教員・学生参加型） 2016年度研究成果報告書

プロジェクト 学生代表者	学科・学年	氏名
	スポーツウエルネス学科・3年	坂田 莉菜
指導教員	所属・職名	氏名
	スポーツウエルネス学科・助教	安藤 佳代子
研究課題	ブラインドサッカー体験会を通じて、障がい者スポーツ普及と活性化を図る	
研究年度	2016年度	
プロジェクト 分担者	なし	

プロジェクトの内容及び成果の概要

1. 目的・概要

2016年1月19日（木）、ブラインドサッカー日本代表の加藤健人選手を立教新座キャンパスにお招きし、立教大学フットサルサークル（RCC）学生13名を対象に、ブラインドサッカー体験会を開催した。ブラインドサッカーの1番の特徴としては目にアイマスクを付け目が見えない状況の中で、音だけを頼りにボールを扱うことである。目が見えない状態でプレーすることで、普段いかに目に頼って動いているかを多くの学生に実感してもらおうと共に、ブラインドサッカーをはじめとした多くの障がい者スポーツの普及につなげることを目的に体験会を企画した。また、目が見えない状況であることから、参加者同士がいつもより多くのことを言葉にしてコミュニケーションをとる必要があり、ブラインドサッカーを行うことはコミュニケーション能力の向上や学びにつながると考えた。

2. 実施内容

はじめに加藤選手からブラインドサッカーのルールについてご説明いただき、コート内に入っている選手には仲間の声が非常に大切であることについてお話しいただいた。その後、全員でストレッチを行い、基本練習を行った。まず加藤選手にお手本のプレーをやっていただき、アイマスクを付けボールに馴染むことから練習が始まった。時には、2人組やチームに分かれてドリブルのスピードなどを競い合った。最後は、ボールを受け取りドリブルでゴールまでボールを運び、仲間の指示を頼りにシュートを放つといった内容の練習だった。また、加藤選手から、所属するクラブチームのこれからの試合日程を教えていただいて終了した。

3. 成果・考察

体験会を通じて、事前・事後アンケート結果からも、「目が見えない状況でいかに声が必要か実感した」「いつも以上にコミュニケーションをとった」といった感想に加えて、「いつものプレーでも生かせる部分があった」などブラインドサッカーは健全者が生活していく上でも必要になるコミュニケーション能力を向上させる効果があることがわかった。

この体験会によって、パラリンピック競技の体験のみならず、普段のコミュニケーションについて意識する機会となり、さらには能力の向上にもつながる経験ができることが考えられた。このように障がい者への理解を深めていくと共に、障がい者スポーツの普及を進めていく活動を今後も行っていく必要があると感じた。